

令和2年 第11回ダイバーシティ推進ランチョンセミナーを終えて

2020年9月19日～21日に開催された日本植物学会第84回大会では、本年度より委員会名が「男女共同参画委員会」から「ダイバーシティ推進委員会」に改称したことに伴い、ランチョンセミナー名も改称になりました。当初名古屋大学で行われる予定だった大会は新型コロナウイルスの影響で初のオンライン開催となったのですが、委員会は「海外に在住する方にも参加していただけるのではないか」と、この機会をむしろポジティブに捉え、海外研究生活をテーマとしたランチョンセミナーを企画しました。大会2日目の9月20日、「海外どうですか?～欧・米・アジア、比べて見えてくる多様な研究ライフ」というタイトルでZoomウェビナーによるランチョンセミナーを開催しました。

ランチョンセミナーでははじめに三村徹郎学会会長からご挨拶があり、ご自身も海外留学によって様々な国で様々な人と出会い研究の視野が拡大して発想の広がりをもたらしたこと、今でも若い頃に出会った海外の知人と交流が続いているなど、研究だけでなく人生を豊かにした経験をお話いただきました。最近は何の惑星に行くことも考えている高校生と出会ったそうで(!)、ぜひ広い視野で自分の活躍場所を意識してみたい、というメッセージをいただきました。井川智子ダイバーシティ推進委員会委員長からは、日本植物学会におけるダイバーシティの現状について紹介がありました。まず日本では研究・技術職での女性比率は17%程度で、2020年のWorld Economic Forumの総合評価(経済、政治、教育、保健分野での評価)では日本の男女共同参画は153カ国中121位であり、先進国では最下位であるデータが示されました。それに対して、日本植物学会ではこれまでの10年間で学会員の女性比率が5%ほど上昇し、現在は24.1%と高い数値になっていることが紹介されました。さらに会員のアカデミックポジションを男女で比較すると、准教授までの年代では男女比率が同程度である傾向が見られ、今後も学会全体での女性比率が上昇していく可能性が示されました。

続いて爲重才覚・横浜市立大学特任助教の司会のもと、パネルディスカッション「海外どうですか?」が開催されました。海外での研究環境について生活も含めて色々とお話を伺うために、アメリカ、ドイツ、中国で現在ご活躍、またはこれまでにご活躍された豊田正嗣氏(ウィスコンシン大学マディソン校、現/埼玉大学大学院理工学研究科・准教授)、中野亮平トーマス氏(マックス・プランク植物育種学研究所・PI)、山室千鶴子氏(福建農林大学 HIST-

第11回 日本植物学会 ダイバーシティ推進委員会 ランチョンセミナー

9/20 (日)
13:15-14:30

海外 どうですか?

～欧・米・アジア、比べて見えてくる多様な研究ライフ～



豊田 正嗣
ウィスコンシン大学
マディソン校
(現/埼玉大学 大学院
理工学研究科 准教授)



中野 亮平トーマス
マックス・プランク
植物育種学研究所
Department of Plant Microbe
Interactions
Principal Investigator



山室 千鶴子
福建農林大学
HIST-HEMC
教授

プログラム

13:15-13:20 日本植物学会会長 挨拶
三村 徹郎 (神戸大学・名誉教授)

13:20-13:30 「日本植物学会におけるダイバーシティの現状」
井川 智子 (千葉大学・大学院国際学術研究科・准教授)

13:30-14:30 パネルディスカッション「海外どうですか?」
司会: 爲重 才覚 (横浜国立大学・本原生物学研究所・特任助教)

研究の進め方に始まり、語学、グラント獲得、就職、生活、育児・・・一口に海外と言っても、国や地域で事情はきっとさまざま。今年のランチョンセミナーでは、3人のパネリストからアメリカ、欧州、中国での研究生活の様子を海外からもオンラインでリアルタイムに聞いて、比較を通して見えてくる日本の現状と今後の展望について、皆さんと考えてみたいと思います。今回は、Zoom webinarによる開催となります。

日本植物学会第84回大会に参加登録された方はどなたでも本セミナーに自由に参加できます。大会LINC-Bizサイトでアドレスをご確認ください。



HBMC・教授)の方々にパネリストをお願いしました。以下、お話の一部を箇条書きで紹介
します。

女性比率について

アメリカ：ポスドクも PI も半分程度

ドイツ：ポスドクは半分程度だが PI は 1/3 程度

中国：学生は女性がほとんどで（特に生物分野）、PI は半分程度

ポスドク、アカデミックキャリアについて

アメリカ：年齢の高いポスドクも確かにいるが、新しいポジションを見つけるためには研究
分野よりも技術を売りにして職を得るなど、苦勞もしている。ただし、皆幸せそ
う。PI ポジションへの応募では、採用側が CV に年齢や性別を書くことを求めな
い。ただし、Ph. D.を取得した年から年齢が推察されるし、同程度の能力を持っ
た候補者が複数いる場合は伸び代を期待して若い人を採用する考えもあり。

ドイツ：ドイツでの研究期間が一定年数以上経ったポスドクはアカデミックポジションへ
の応募ができない（抜け道はいくつかあるが）。CV には応募者自ら年齢、性別だ
けでなく子どもがいるか、なども書く人が多い。PI ポジションに関してはドイツ
に残り貢献する意思を確認するための書面を書かされる（強制力はないが）。

中国：大学がサポートする 2 年間のポスドク制度がある。その後 PI に就くケースが多
く、3 年以上のポスドクは「長い」という意識がある。CV 様式に決まりはないが、
採用側としては若い方が良い、という考え方はある。

言語について

アメリカ：移民が多いので、英語を母国語としない人を対象とした無料の授業を受けられる。

また、英語教師希望の学生とのマッチングを大学が行ってくれる。

ドイツ：研究所では英語で、ほとんどがノンネイティブ。生活においては、例えば子どもの
保育園や学校の先生などは英語が使えない人もいるが、現地のドイツ語ができる
日本人の知り合いに仲介を頼むなどして乗り切っている。

中国：中国語が達者でなくても大丈夫。買い物などではある程度使うが、研究室では学生
とも英語で会話できる。

その他、働き方や研究時間以外の飲み会・イベントへの参加について、海外へ行って良かっ
たことなど、お国柄なども含めて大変面白い話が盛りだくさんでした。お話の中で強い印象
を受けたのは、日本と比べて「自分は自分」という考えが強く、キャリアに関しても周囲と
の同調はそれほど気にしない、という意識の文化でした。パネリストの皆さんは海外での苦
勞や辛い思いも経験されていますが、いずれも「後悔したことがない」という明確なお答え
でした。最後にパネリストの方のコメントと司会の爲重氏の統括から、「日本にいることも良

いし、海外に行くかどうかは自分次第、ただし行って得られることは大きい」、「長期的に行きたい場合は、資金調達方法などの情報収集をして複数の計画を立て、国際学会などでネットワークを築いておくといい」、「日本国内の国際化も重要で、それが海外とのネットワークを広げ、研究活性に繋がるだろう」というメッセージがまとめられました。海外を視野に入れている視聴者にとっても、渡航への心理的なハードルが下がったのではないかと思います。

今回は Zoom ウェビナーでの形式を活かし、途中チャットに書き込まれた質問を取り上げたり、視聴者にはリアルタイムアンケートに参加していただくなど、非常にインタラクティブなセミナーを行えました。最後のリアルタイムアンケートでも「楽しかった」と 100 名以上の方々に投票していただけて、委員一同ほっとしています。Zoom 退室時にもオンラインアンケートフォームをリンクさせたことで集計・グラフによる見える化等の作業を効率化でき、オンライン開催のメリットが認識されました。

今回のランチョンセミナー開催にあたり、準備に励んでくれたダイバーシティ委員の皆様、お世話になった学会運営委員の方々、パネリストをお引き受けいただいた皆様、Zoom ウェビナー管理をしてくださった大会委員の方々、そして三村学会会長に深く感謝いたします。



山室さん：今回は日本からご参加いただきました。早く中国へ戻れますように。



豊田さん：ウィスコンシン大学の背景とともに、語り口も楽しく、たくさん情報をありがとうございます。



中野さん：マックスプランク研究所の背景とともに、時々娘さんも登場して場を和ませてくれました。



爲重さん：「楽しかった」アンケート結果にとっても喜んでます。司会お疲れ様でした！

* 本セミナーの録画映像を 2020 年 9 月 28 日に学会員宛に配信しています。

ダイバーシティ推進委員会委員長：井川智子